



## 九 再び 冬はつとめて（新東の京巻 上）

---

新しい年を迎えた。新年は、早々から、京の都は、参拝客などで賑わい、塔レンジャーたちも、自分の寺などで、お客さんたちを迎えるなど、忙しい毎日を送っていた。それぞれが、この一年を振り返りながら、去年は、春は大仏、夏は塔、秋は城、冬はタワー、といろいろな勢力がこの京の都に乗り込んできたが、何とか、京を都として守ることができてよかったと感慨に耽る。そして、今年も、京の都を守ろうと意を強くするのであった。

京は、正月三が日だけでなく、節分やお雛祭り、大学の入学試験など、年当初から、様々な年中行事があり、塔レンジャーたちも、それぞれが忙しく立ち回っていた。この日々の忙しさこそが、平和であることの、証でもあった。

そんな忙しい時期も過ぎ、山にはしだれ桜や山桜が咲き、鴨川を始め、平地のそめいよしのつぼみがふくらみはじめた時のことだった。春めき、暖くなってきた日々だったはずなのに、急に、冬戻りの寒波が来襲した。

「前にもこんなことがあったなあ」

人々が空を見上げた。そこには大きな影があった。確か、年末に京の街に現れた影の倍以上の大きさだった。そして、その影からは、冷たい風が吹きすさび、街の人々を寒気で覆った。

「寒い。寒い」「冷たい。冷たい」

人々は、タンスから取り出した春めいた服を脱ぎ捨て、再び、しまったばかりのコートやセーターを取り出して、体中にくるまった。中には、灯油がなくなったので、もういいか、と、早々と、ストーブをしまった人たちも、この寒さの影響で、すぐに倉庫からストーブを家の中に戻し、空になったタンクを持って、ガソリンスタンドに向かった。

このままでは、桜の開花もかなり遅れそうに思えた。そうなると、京の都への経済被害も増大しそうだった。塔レンジャーたちも、桜の開花に向けて、自分の寺だけでなく、近隣の神社仏閣での桜祭りなどの準備に余念がなかった。

「おかしい」

その異変に気付いた。そして、仲間が集めた。

「東の京タワーは、帰ったのではなかったのか？」

「お互いに理解しあったはずなのに」

「だが、前の影の倍以上の大きさだ」

「それなら、東の京タワーではないのか」

「とにかく、あの影を追い払おう」

全員の声一致した。

塔レンジャーは合体すると、その黒い影に向かって空を飛んで行った。

「お前は誰だ？」

合体塔レンジャーはその黒い影の前に立ちはだかった。だが、目の前の、その巨大な影は、年末に現れた東の京タワーをはるかにしのいで、巨大だった。

「小僧。お前が塔レンジャーか。俺は、新東の京タワーだ」

強大な黒い影が、急に七色に光り出した。

「ま、まぶしい」

黒目が白目になり、その白目が七色に変わるほど、目の前が見えなくなった。それを避けるため、思わず目をつぶる合体塔レンジャー。それでも、眼を細めながら、眼を開いて、相手の存在を確認した。

「なぜ、俺たちの名前を知っている」

「ふん。別に知りたくて知ったわけじゃない。おいぼれに、都を取り返して来いと言ったら、互いに協力して、発展していった方がいい、とほざきやがった。だから、いつまでも、真の意味での都になれないんだ。政治、経済、文化においても、名実ともに、今は、東の京が都なのだ。東の京が、この国の首都なのだ。だが、格式と伝統とか、そんなくだらんものが、東の京を真の都として認めようとしていない。邪魔しているのだ。この国に、都は二つもいらぬ。一国二首都ではないんだ。二番ではダメなんだ。一番ではないとだめなんだ。だから、俺が、この古臭い街

をぶっ壊しに来たんだ」

目の前の巨大なタワーが一気にまくしたてる。その言葉を聞いて、塔レンジャーたちはいきり立つ。

「なんだと。そんなことはさせないぞ。それに、お前が言った、おいぼれとは、東の京タワーさんのことか」

「そんな名前だったかなあ。あんな、役立たず、は、もう、覚えていない」

「何を言うか。歴史を踏みにじるもの、歴史を軽んじるものは許せん」

合体塔レンジャーの体が黒から赤に変わるほど、怒りが充満した。

「お前だって、東の京タワーさんの歴史があったからこそ、存在しているのだろう」

巨大なタワーに侮蔑の意味を込めて、人差し指で顔面を指差す合体塔レンジャー。

「ふん。それはありがたいかもしれんが、もう、そのDNAが俺に引き継がれた以上は、存在する価値も、必要もない。それは、お前たち、京の都も同じだ。実質上、この国の首都は東の京だ。だから、いつまでも、東の京という呼び方ではなく、新京と名乗らなければならぬのだ」

「それなら、この京はどうなるんだ」

合体塔レンジャーがその言葉を遮る。

「古京潰けとして、樽にでも詰め込んでやる」

「そんなことはさせないぞ」

合体塔レンジャーが新東の京タワーに飛び掛かろうとした。その瞬間、誰かに後ろから羽交い絞めにされた。

「誰だ。離せ」

首を後ろに回す。そこには、なんと、仲間のはずの京のタワーがいるではないか。

「お、お前は」

驚きのあまり、急に名前が口から出せない合体塔レンジャー。だが、京のタワーは、夢遊病者のような顔で、何の反応も示さない。何者かに操られているようだ。

「は、離せ。京のタワー」

ようやく、京のタワーの名前を呼んで、京のタワーの手をはがそうとするが、それでも、京のタワーは離れようとしなない。かえって、力を込めてくるだけだ。

「ええい。仕方がない」

合体塔レンジャーは、同じ京都を愛する仲間なので、手荒なことはしたくないため、一旦、合体していた体を分離させ、京のタワーの手からするりと抜けた。京のタワーは、今まで掴んでいた物体がなくなったので、今度は、自分で自分を愛おしそうに抱きしめた。

「バキバキ。バキバキ」

操られているために、手加減を知らず、京のタワーは自分の体を締め上げて、あばらを折り始めた。そして、その痛みに耐えかねたのか、地上へと落下していった。

「京のタワー！大丈夫か」

叫ぶ塔レンジャーたち。

「ふん。ふがない。所詮、古京の都のタワーだな。体まで腐ってやがる」

新東の京タワーがあざけるように、地面に叩きつけられた京のタワーを一瞥する。

「ゆ、ゆるせん」

塔レンジャーたちは再び、合体すると、必殺技の、きりもみシュートを、新東の京タワーに喰らわそうとした。それでも、新東の京タワーは余裕なのか、悠然と構えているだけだ。

「よくも、仲間を出汁にしたな。この怒りを思い知れ」

合体塔レンジャーの回転ドリルが、新東の京タワーの腹に刺さろうとした瞬間、何かの影が遮

った。それは、大きな城壁だった。その城壁にぶち当たる合体塔レンジャー。

「お、お前は！」

そこには、二条の城がいた。苦悶の表情の二条の城。

「そこをどくんだ。二条の城」

合体塔レンジャーは、二条の城から飛び離れると、再び、新東の京タワーの頭上から突っ込んでいった。

「どうやっても無駄だ。俺には傷一つ付けることはできないぞ」

その言葉通り、合体塔レンジャーの足の先端が、新東の京タワーに突き刺さろうとした瞬間、再び、目の前に、大きな壁が現れた。

「そ、そこをどくんだ。二条の城。お前は、操られているんだ。目を覚ませ」

必死の願いも空しく、再び、塔レンジャーの足の先端が二条の城に突き刺さった。苦悶の表情の二条の城。その攻防が何回も、何回も繰り返された。

「はあ、はあ、はあ」

合体塔レンジャーの息遣いが激しくなる。そして、その前には、体中のあちこちの石垣が崩れ。穴が開いた二条の城がいる。これでは、とても国宝の価値はない。だけど、二条の城は何も言わない。ただ、黙ったまま、苦痛から逃れるかのように立ち続けているだけだった。

「頼む」

「もう、退いてくれ」

「俺たちは、この京の都を守りたいだけなんだ。それをわかってくれ」

「このままではお前を壊してしまう」

合体塔レンジャーの心に迷いが生じた。その時だ。再び、何者かが、合体塔レンジャーを後ろから羽交い絞めにした。

「だ、誰だ」

顔を後ろに向ける。そこには、先ほど地面に叩きつけられたはずの京のタワーがいた。

「やめろ。はなせ。お前も、あの新東の京タワーに操られているんだ」

だが、京のタワーは薄ら笑いをするだけで、何の返答もしない。

「ウグ」

強烈なタックルが体を襲った。目の前には、二条の城がいた。

「やめろ。お前たち」

合体塔レンジャーは、必死に、何度も叫ぶが、京のタワーは羽交い絞めにされたまま、二条の城が体当たりを繰り返した。

「あはははは。どうだ。合体塔レンジャー。同士討ちの味はまた格別だろう。歴史を振り返ってみろ。権力者同士の争いの中で、この都は何度も壊されてきたんだ。今は、まさに、それを如実に再現しているわけだ。歴史は韻を踏み、お前たちは、その歴史に踏みつけられているわけだ。あはははは」

新東の京タワーの高笑いが響き渡る。その高笑いに呼応するかのようには、二条の城の体当たりが続いた。

「ボキ」

その度ごとに、合体塔レンジャーのあばらの骨が折れる音がする。

「このままでは体がバラバラになってしまうぞ。一旦、離れるか」

「だが、二条の城も京のタワーは相手に操られたままだ」

「じゃあ、どうする」

「俺にいい考えがある」

合体した一番上の水レンジャーが手を大きく伸ばした。そして、叫んだ。

「雷大明神。この場をお救いください」

その願いが、雷大明神に届いたのか、急に空が黒い雲で覆われた。ゴロゴロと雷が鳴り始める。

「ふん。この場に及んで、仏や神に頼るのか。そんなものは迷信だ。やはり、古臭い、京の出身者だな。落ちたものだな、合体塔レンジャー。どうせなら、雷に当たって、地面に落ちていけ」

新東の京タワーがあざけりの笑いを絡み合う三体に向けた。それでも、合体塔レンジャーは手を合わせ、眼をつぶり、祈り始めた。すると、黄色い稲妻が光りだし、空が切り裂かれた。そして、その光が合体塔レンジャーたちに落ちた。合体塔レンジャーの体全身が光る。その光は二条城と京都タワーにも一瞬で伝わった。

「うわあ」

三体は、雷を受け、気を失ったのか、暗い影で覆われた地面に、吸い込まれるように消えていった。